白河台

小松同窓会会報

第25号
発行
小松同窓会本部
〒923-8646
小松市丸内町二ノ丸15
石川県立小松高等学校内
同窓会報編集委員会
TEL・FAX (0761)21-6330
印刷　マルト印刷工業株式会社

年頭所感

小松同窓会長　吉田　歳嗣

小松同窓会会員の皆さん、あけましておめでとうございます。

大変不透明な時代でありますが、小松スピリッツで賢明なる思慮の下、たくましくご活躍の事とおよろこび申し上げます。

昨年は関西小松同窓会、名古屋での東海小松同窓会、富山支部の各総会に出席させていただきましたが、故郷を離れられた皆さんの母校を想う強い気持ちに触れ、同窓会を預かる者として大きな責任を感じました。

昨今は、さまざまな面で改革が俎上に上っておりますが、週五日制等教育改革も急ピッチで進んでおります。

石川県では、特定学科の強化を図る「スーパーハイスクール」構想や、中高一貫教育等、新しい取組みもなされております。学校当局でも知恵をしぼり、全教職員が一丸となって多くの問題点に挑戦されておりますが、いたずらに時流に流される事なく、「自主自律」を旨に教育の本分たる学業の向上に一段の努力が必要と思います。

又、現在行われています石川県内三学区制のあり方も、規制緩和や町村合併のありよう等で、早晩その改廃が論ぜられると思います。

一部では全県下一学区制になる可能性が大であります。

母校小松高校が県下の最優秀校として、その存在理由の何たるかを示さなければ、向う三年の間に起る大きな改革の波を越えることができません。

次に、学校改築（新築）工事は、二期工事に入り着々と進捗しています。旧講堂の正面部分を、新築集会室の正面に取り入れるなど、構造物の中にも伝統を生かす工夫がなされています。

平成十八年には、校庭等の整備も終え、完成の予定です。その時には百十周年を前倒しして、全国同窓会開催も日程として考えなければならないとも思っています。

又、九月末に学校創立記念日に合わせて、この二年開催してまいりました「ホーム・スクール・カミングデー」では階段教室で、なつかしい先生方にお願いしての講義（授業）や天守台下での会合には、多くの同窓会の皆さんのご参加をいただき、好企画との評価をいただきました。

伝統と進取、新しい世紀の母校の発展を念じ、同窓会々員の皆様のご健祥をお祈り申し上げます。

（高校9回）

『第2回 ホームスクールカミングデイ』

四十数年ぶりの生徒

山口 俊一郎

去る九月二十九日、母校小松高校において第二回ホームスクールカミングデイがあった。

前日は、山代温泉において六十名近くが参加し、還暦記念の同窓会が行なわれた。

内藤幸一先生

幹事の心配りにより、楽しい一夕を過ごした。

物故者の氏名や出欠返事のハガキによる近況報告等、知りたいことを全て要領よくまとめた小冊子はほんの序の口として、高校の卒業アルバムの顔写真入の名札、オクラホマミキサーを宴会場に流しての雰囲気づくり（外見はいかんともしがたいが、気持ちだけは金ボタン・セーラー服に戻る）。校歌斉唱の時、歌詞を大きく両面に書いたプラカード風厚紙を、高く掲げて持ち回る心憎いばかりのアイディア等々。

幹事には感謝感謝。

「幹事は仕事しとる暇あるんかいや」と誰かの声。

次の日は、ホームスクールカミングデイで、記念館階段教室での特別授業を受け、改築中の校舎等も見て、天守台下での昼食の懇親会。いい思い出になった。

ところが、である。

十一月の某日、同級生の女性から突然電話があった。

「山口君、この前のホームスクールカミングデイのこと、同窓会報の天守台に書いて欲しいげ。二時限とも授業出とるし、その後の懇親会も出たんやろ」

日頃女性にもてない当方には、女性にものを頼まれるとそのこと自体に感激してしまって、泡を食ったようにOKしてしまう悪い癖がある。

それからズーッと、十二月の初旬まで〇〇暇なしで、アセクッテいて原稿のことはぼんやりと気にしていただけである。

だんだん寒くなってくると、急に不安になってきた。

さて、いざ書こうとしてハタと困った。

実は、前の晩の同窓会の二次会で持病のカラオケ好きが出て、広いホールで歌いまくった。

当然次の日は、日頃にも増して頭ボー。しかも年のせいか、授業中ノドの奥と気管の上辺りがしめつけられるように痛かった。当日のことは、どうもはっきり覚えていない。原稿を書くんなら、メモでもしておけばよかった。

さらに、よくよく考えてみたら、懇親会は用事があり中座していた。

あの時そう言って断ればよかったが、今さら後へはひけない。

ともかくこれだけ長い前置きと、言い訳の付いている文章も珍しいだろう。

早く本題に入らなければいけない。

さて、還暦の十三回生と総会等の担当回の二十九回生、そして初老の三十三回生のOB・OGを対象にした特別授業の第一限は、内藤幸一先生による「徒然草雑談」であった。

パンフレットの講義概要によると、「ぼろぼろという存在についての考察と兼好法師の生き方との関係（徒然草一一五段より）」とある。

内藤先生のお話からは、生きとし、生けるもの、人間へ対する深い愛情が伝わってきた。先生のお話を聞いていると、鎌倉時代の人間の生きざまがありありと眼前に浮か

んでくるように感じた。

又、作者の吉田兼好についても、先生の愛情のこもった目から見ると、「優柔不断で、愚痴っぽい一面もあり…」ということであり、私も先生のお話を聞いて、兼好が身近に感じられ、一段と好きになり、又さらなる尊敬の念が湧いてきた。

定まりのない且つ不況の今日、いやそういう時だからこそ、与えられた命を大切にして懸命に生きることに価値を置いた兼好の存在は、今後ますます光ってくるだろう。

安田進一郎先生

二限目は、安田進一郎先生の「偏差値は諸悪の根源か」であった。同じく講義概要によると、「偏差値の計算方法を簡単に説明し、その有効な利用法を探る」とある。

巷間ともすると、受験戦争と結びつけられて、悪者扱いされている偏差値であるが、生徒の能力をきめ細かく正しくキャッチし、よりよい指導のためには不可欠のものである、という話であった。（と思うが）

世間のムードに流されない、真に生徒の側に立った、合理的で思いやりのある数学者らしいお話であった。

高校時代、数学は対数までしかついて行けなかった自分は、先生の頭をただ眺めているだけだった。

両先生が生き生きと、そして淡々と一つのテーマに沿って自信をもって話されるのを見ているうちに、心はいつか高校時代にもどり、「こんな世界があったんだ」と深く感じ入った。

階段教室一杯になったOB・OGの顔のシワを除けば、雰囲気は昔の教室に戻っていた。

先生の楽しそうな福福しいお顔を眺めている内に、校歌の一節、「波風あらき世はまてど、汚れにそまぬわが友よ」がなぜか心に浮かんだ。

自己の正義と生活の糧が接近すればするほど、人は幸せになれるんだろうなぁ、とも思った。

それから改築中の記念館及び新校舎を見学した。

すばらしい近代的な校舎を見た瞬間、昔の汚い校舎（失礼）が急に思い出された。

弁当の残り汁を木製の床にダラダラとたらして捨てていた友のこと、カベの穴に棒をつっこんで隣の教室とケンカしていた友のこと、火ばちのあったことも思い出した。

青雲の小径をゆっくりと歩いて、天守台下へ。

現役ブラスバンド部のBGMによる歓迎。

久しぶりの授業に緊張した頭をほぐしてくれる懇親会。

今さらながら、母校の広い敷地と天守台辺りの歴史の重みを実感した。

この地で青春を過ごし、世界のはてまでも散っていった幾多の同窓生達。

心の中には、楽しい時も悲しい時も、いつもこの風景があったことだろう。

（高校13回）

何十年ぶりの授業かな

古希も過ぎて 変化に追われて、 随想3題

村中 高石

一・鼻歌

「晴れた空／そよぐ風…」と、寝起きで直ぐの歯磨きの時に、無意識の歌を声もほとんど出さない感じで鼻歌を唄っている。このような状況になったのは何時の頃であるか分らない。古希を過ぎすべての社会的な制約や子供や家族間の重荷を下ろした所為なのであろうか、世に云うところの悠々自適の生活に入っているのであろうか、知らない。

私は小さい時から、寝起きが悪く、何時も午前中は不機嫌であった。母からも小言を云われていた。結婚してからも、会社勤めの時も、その様であった。これについては一つの結論を出していた。それは血圧が低いからであると。

ところが今、不整脈が出るようになって医者に掛かりながら血圧を毎日測定するようになっている。そして、一年程前から血圧が高いと云われる。しかし、長年の苦痛の連続が解消され、爽やかな寝起きができるようになってきている。この躁状態はやはり、血圧のなせる業であるのか、と嬉しいような不安な気持ちにさせられているのである。

二・徳利の首

晩酌は、週一日の休肝日を除いて、延々と五十年ほど続いている。約二合のこの楽しみは今では欠かせないものである。夕食時に二合徳利に自分で酒を注ぎ電子レンジでチンをして燗をするのである。

たまたま、女房殿が燗をして出してくれることがあった。すると、私の指定した時間チンをして取り出してきた。徳利の首を右手の親指と人差し指、中指の三本の指で掴んで「アチチ、アチチ」と出してきたのである。「おや、これはどこかで見たスタイルであるぞ」「そうだ、湯煎で燗をする時の格好である」一杯飲み屋でもこれである。我が家でも電子レンジのない時は、やかんの蓋を取り徳利を湯に浸け、燗をしていた。そして取り出すときには、徳利の首を右手の三本の指で取りだしていたものだ。

電子レンジの加熱は加熱物質の分子運動の摩擦による加熱であるから、其の内部から温度が高くなり、高くなった液体が対流によって首の部分が最も高くなっている筈だ。そして徳利の底から側面は、即ち徳利を持つに最も好い部分は熱くなく持ち運びは快適である。私は何時しかこのスタイルを卒業していたのに、女房殿は昔の湯燗のスタイルを今でも持ち続けているのである。人間の習慣の恐ろしさに感心した場面であった。

三・靴音

「コツコツコツ」と澄んだ高い靴音を立てて後から人が来る。ある午後六時過ぎの少し薄暗くなった、人気の少ない寂しい道である。この音は町の中でよく聞く音である。特に地下道などでは反響して響きわたる。直ぐに分かる。淑女の靴の音である。この頃男性の足音はほとんど聞かれない。あっても何かひずんでいるのか、低い雑音の多い音だ。私は靴の軽いことが選択の第一条件であるから、ゴム底のスニーカーである。靴音はない。考えれば、今ほとんど男性の靴音が聞かれ無くって、女性の靴音ばかりが追いかけるように響きわたっている。

変化は、軍靴の音から女性の靴音であろうが、私には軍靴の経験はない。しかし、戦後、経済再建期は革靴の修理屋さんが多くいた。鋲打ちの革靴がずーっと続いていた。そして、靴音を立て世界を駆けめぐっていたのである。それが、何時頃からかは知らないが、男は靴音を立てず、女性が「コツコツコツ」と澄んだ高い音を立てて闊歩しているのである。

私の歩行速度は古希を過ぎてとみに遅くなっている。歩行幅が狭くなっているのだ。

「コツコツコツ」とリズムはいままでの男性のものだ。足の長い振幅の大きいものだ。徐々に近づいてくる。昔、胴長短足は日本女性のものであった。が、このリズムは長い足のものだ。そして、澄んだ音は靴のかかと全体が堅いもので出来ているのであろう。高い視点から周りを睥睨し、外股の颯爽とした淑女であろう、と後ろを見なくても想像できる。

三年ほど前から地区の老人会で社交ダンスを始めている。まわりは同年輩であるから、胴長短足の純日本的、いや、もうこの様には云われないのか知れない、古典的な日本女性なのである。あの、颯爽とした淑女と踊ることになれば、見栄えもよくそれなりの楽しみがあるかも知れないが、緊張しツッパリの踊りとなろう。やはり「御同輩お元気で！」と気楽に踊れるからこそ最高なのだと自己愛に浸りながら、そして、彼女たちも我々と一緒に歩き回って足をすり減らして短足になったのだろうと思うことにしている。

等々、よしなしごとを思いながら、少し暗くなりかかっている道を、近くの企業のOLさんに、追いかけられ、追い越され、そして、見送るのである。

（中学45回）

平和を守る女性運動

永井 元子

私はずっと悩み考え続けて来たことがあります。何千年の古しえより戦争の絶え間のない人間社会。高度な頭脳をもち、今や宇宙までもいく科学性をもちながら。戦争だけは止められない。万物の霊長と云われる人類が。この問題を解決出来ないと云う不思議さが納得できない。戦争と平和の問題は永遠の課題なのか。

一九六二年、平塚らいてう、野上弥生子など各界各層を代表する著名な女性三十二名で設立された新日本婦人の会。戦争はしない、平和憲法を守る、子供と婦人の権利と生命を守るため力をあわせる、世界の婦人と手を継ぎ永遠の平和をうちたてる。この目的をかかげて発足した新日本婦人の会に賛同して直ちに入会し今日に至っています。平成十四年十一月十九日、この会の四十周年記念行事が千葉県舞浜のベイNKホールであり私も参加

しました。舞浜の駅には溢れんばかりの高齢の女性から赤ちゃんを抱っこした若いお母さん達、喜々として晴れやかな女性の顔、顔、顔。会場前には親子鳩の会旗がひるがえり北は北海道、南は沖縄まで九千名を越える会員で熱気あふれていました。戦争はイヤと云う思いが一つになったと云う感じで、大変心強い気持になりました。丁度この会が出来た頃、日本中に小児マヒが大流行しました。国にその対策はなく女性達は真剣に考え悩みました。当時国交のないソ連で効き目のある生ワクチンがつくられていたのです。母親達は子供の命を守るため必死の思いで粘り強く厚生省に仂きかけ、国は外国からワクチンを輸入したことがない、法律にふれると、かなくなに拒んでいた政府の方針を変更させ、ソ連から一三〇〇万人分の生ワクチンを輸入させ多くの子供に命を救ったのです。この様にして子供と女性の幸せのため、ありとあらゆる現象をしっかりとらえ今何をしなければと云うことで活動し、政治に反映させて来ました。この間実現してきたことと云えば数限りなくありますが、最近のこととして三十人学級の実現、乳幼児医療を小学校前まで無料に、安全な食料を学校給食に。今日本の食糧自給率が四割と云う危機的な情況になっている折から、日本の農業を守る意味からも安全な食糧は日本の大地からをモットーに、産直運動などにも取り組んでいます。

（県女33回）

生きる

元木 郁子

謹んで平成十五年の
御祝詞を申し上げます

松に来て唄う色鳥年始め
九天のいや栄祝うがごとく

『人生わずか五十年・明治は遠き大正も』昭和一桁生まれの私達の、よく話題にした言葉です。平成も、はや十五年に垂（なんな）んとして居ます。

戦時中は、疎開で、転校して来た学友や、防空壕作り、亦食糧難、物資不足というご時世でした。衣料品はキップ制、稲刈り奉仕や、干し草供出もしましたが又、学校帰りに友達の家へ集まって、コックリさんで、好き嫌いと大はしゃぎしたり、本の回し読み等、それなりに楽しさも、若さも満喫出来た青春であったと思っています。

思い出は防空ズキンにもんぺ履き
きんろう学徒に終戦勅語

オイルショックや
バブルが弾（はじ）けた時もあり
夫（つま）も逝（ゆ）きたり無常を
けみする

農業も近代化され、なつかしい早乙女の田植え風景も見られ無くなってから久しい。毎日の新聞の折り込みチラシの多いこと、お店へ行けば衣、食や、住までもが撰（よ）り取（ど）り見取りで、何でも手に入る。中でも携帯電話は、ボタン一ツで、四六時中何処でも、誰とでも隣に居るようにお話し出来る。

新世紀科学や文化どこまで飛躍
計り知れない宇宙の果てか

便利で楽しい反面、悪用されての犯罪の多いのは悲しい事です。田舎でも『隣は何をする人ぞ』と云うような殺伐とした時代に成りつつ有るように思います。リストラや不況が叫ばれ、少子高齢化が進み、進退極まっている私たち老境に有る者も、総てが文明の利器に囲まれて昔を思えば、環境、私生活共に雲泥の差です。特に家に在っては電気食う音に振り回されて、唯々、世の移ろいに戸惑うばかりです。

むなしさの人事でなし昨日今日
明日は我が身と老境のわれ

紆余曲折（うよきょくせつ）の世を生きて、なるようにしか、ならぬ定めに、老春と決め込み、身近に、出来る事からと、ボランティアに混ぜて頂き、和やかにお話の輪に入ったり、閉じこもり防止のつどいでの本読みや、紙芝居等社会福祉活動に参加して少しでも世間様のお役に立てればと思っているこの頃です。

今日もまた雨だれ打法でワープロを
ボケ防止にと和讃（わさん）打ちおり

（県女34回）

「宇吉郎のこと」

北山 寛子

四国の造り酒屋、亀岡徹氏が天然酵母菌を使って「宇吉郎」銘の吟醸酒を作られ、銀座でお披露されるとのお知らせを小松の新田久子様より頂きお誘いを頂きました。

会場には「鴎外の坂」なるお酒とそれにまつわる原画が飾られてありました。

中谷宇吉郎に纏わる原画は、雪の中テントの外で顕微鏡を覗いておられる学者中谷先生のお姿が描かれており、他のお酒に纏わる原画には狐や狸など戯画的に仕立てられてあるのと異なり神聖な感じを受けました。

亀岡氏に「中谷先生のは戯画的になってませんね。」と申し上げましたところ、亀岡氏は「中谷先生の雰囲気には学者姿が似合う様に思え、戯画的に出来なかった」と申され、先生のご様子が端的に偲ばれました。

会場で試飲をと言われましたが、お酒に弱い私は「チョッと辛口」に感じられ、よく冷えた吟醸酒の香りのみ楽しみ、つれあいの為に配達を頼んで帰りました。父同志が同窓の新田久子様と「父達が生きていたらどんなに喜んだことでしょう。」と語り合いました一日でした。

届いた「宇吉郎」を私の所属する短歌結社「心の花」でお祝の会があり持参して、乾杯のお酒にして頂きました。自称「通」を名乗る面々、特に佐佐木幸綱先生は「口当りがよく、喉越しがいいお酒だ。」とお褒め頂きました。

北陸の方々にも「宇吉郎」が浸透し、愛飲されることを祈ってお知らせいたしました。

（県女27回）

関西小松同窓会総会
懇親会開催

関西小松同窓会副会長　清水英俊

関西小松同窓会は十月十九日大阪城を背にした森ノ宮・KKRホテルオーサカで総会・懇親会を開催した。母校野球部が昭和六十一年夏に甲子園に初出場したときを契機として発足して以来三年毎に開催され、今回で七回目を迎えた。中学から高校三十回卒までの同窓百三十名が出席した。

総会は宮崎一也会長（高校八回卒）の同窓会活動を通しての郷土愛、母校愛、兄弟意識の熱意と今後の期待を込めた挨拶の後、経過報告、会計報告、役員改選の議案を満場一致で承認し、新会長に寺本明夫氏（高校四回卒、大阪大学名誉教授・立命館大学教授）を選出した。

来賓の吉田歳嗣小松同窓会長が祝辞と母校百周年記念館の階段教室で昨年より開催された好評の「ホームカミングディ」の模様を紹介されたのに続き、石田毅士郎校長、白江治彦関東小松同窓会長、山上孝俊東海小松同窓会長らが祝辞を述べられた。

懇親会は寺本新会長の同窓会活動についての新企画、アイデア等の抱負とより多くの同窓の参加を呼びかけた挨拶で始まり、一同起立乾杯の後に各回初参加者を囲み歓談、旧交を温めた。校歌斉唱、万歳三唱で閉会とし、各回毎の二次会場へ向かった。

新役員は以下の通り。

会　長　寺本　明夫（高四回）
副会長　清水　英俊（高九回）
　　関戸　治　（高十一回）
　　熊田　満也（高十二回）
総　務　浜元　薫男（高十三回）
　　松島　秀弼（高十七回）
　　中山　雄二（高二十一回）
会　計　竹内　英孝（高十二回）
　　松下　英雄（高十六回）
公　報　柴田　純作（高十四回）
　　山岸　敏明（高二十二回）
他書記三名、監査三名、相談役二名、顧問二名

（高校9回）

卒業50周年記念同窓会

湯浅幹也

昭和二十七年三月、私達は小松高校を卒業しました。三年生の時の校舎は西教場（旧小松工業学校）でした。それからちょうど五十年、六十九歳（かぞえの七十歳）になりました。それでいわゆる「古希」を記念して、同窓会と物故者追悼式を挙行しました。

八月二十四日、記念ゴルフ大会を片山津日本海コースで楽しみ、二十五日に高校記念館で追悼式を挙行しました。その際には、栖川教頭先生にはわざわざご出席くださり、高校の近況について御話いただきました。

その後、天守台、新校舎建築現場など見学して、山代にて懇親会、一泊しました。翌二十六日、バスで昔懐かしい尾小屋鉱山跡や、安宅関所などを回り、中佐のウドンで昼食をとり解散しました。

この折、同級生で人間国宝の徳田八十吉氏の御厚意によって、陶房や作品を見学し、各自でお皿に絵付けをさせていただきました。

出席者は百三十二名の多くをかぞえ、本当に大盛会でした。

私達の高校時代、小松高校は総合制で、特に四回生は一年から三年までの三年間、商業科、工業科、農業科の皆さんも同じ校舎で過ごしました。それで今回は、私達普通科だけでなく、商業科、工業科、農業科の皆さんも有志の方たちに出席していただきました。

高校卒業後五十年、そろそろ古希になりますと、ちょっと立ち止まって、越し方を振り返って見てみたいとおもいます。そしてそれが満足したものであろうと、なかろうと一種の感慨がもたれます。

いままで歩いてきた足跡を特に記録しないまでも、仲間に、息子や娘に、あるいは後輩達にちょっと話しをして、自ら慰めたいと思います。

そこで、先輩達の作られたものを参考にして記念誌（四回生）を作りましたところ、このもくろみにあった、それぞれの思いのこもった、すばらしい原稿が多数集まって、本当に好い記念誌ができあがりました。

なお、記念誌は僭越ながら高校と同窓会に寄贈させていただきました。

こうして私達は、卒業五十周年の記念の会を無事に楽しく、盛大にすることができましたが、会もおわってみて改めて小松高校は学校も生徒も、過去も現在も、すばらしい高校だと思いしらされました。本当に有難うございました。

（高校4回）

尾瀬・燧（ひうち）岳の旅

三井 淑朗

創立百周年記念の折に、富士山に同行した小松高校山岳部OB連（8回生）と、今回は私には『老後の楽しみに』してあった尾瀬へ。更にその奥の燧岳をプラスしたプラン。その隣の至仏岳はこの時期まだ積雪多く、登山禁止という。

6月5日快晴の中、群馬県の鳩待峠から入った広大な尾瀬ガ原をゆったりと行く。まばらなミズバショウ、黄金色のリウキンカ、池塘の水にチラつく小魚はイワナだろうか。

第一泊は第二長蔵小屋。シーズンオフ、予約のお陰もあり、我々だけで一室のぜいたく。

二日目、まだビッシリと春の雪のはりついた燧岳へ入る。雪のため夏道はよく分からないが地形を判断して急傾斜をブッシュに縋り、ほとんど直登。でも柔らかい陽光に引き立てられてジリジリと高度を上げる。約二時間の悪登で1000mかせいで頂上2456m（柴安グラという）にたった。コーヒーを沸かして乾杯！尾瀬の全景を一望できた感動が胸一杯に広がってくる…。我々の降りる予定の長英新道から来た数人のパーティが、雪解けなどの悪条件を告げてくれた。

降路、途中その下が急降下して見えない広い雪の斜面のトラバースに肝を冷やす。

やっと安定した場所にきて、下から来た営林署の若者に出会い、先程の斜面などこのコースの安全性を聞いたが、わりと不親切で妙な感じ。更に下るにつれて頂上での話の通り、夏道らしい長い凹路の解けかけた雪のぬかるみの中、大きな危険はないものの度々横転し、尻餅、前のめりetc相当参ってしまった…。やっと平地へ降り立ってホッとしたら、次が針葉樹の高木林。やはり積雪のため、夕暮れ近い薄曇りの陽射しに方向を惑わされ予定より2倍の時間の後、やっと尾瀬沼の明るい平地に出る。ここの標識もリッパだが内容は不明確。有数の観光地帯なのに一体どうした事か～。

でも、第二泊は第一長小屋。かつての一番しにせの、古く悠々としたたたずまいに、今回の成功を喜び合い、富士山の思い出や、次回の計画などゆったりと旅情に浸ることができた。第三日、この日こそ尾瀬沼のミズバショウの大きい花と、リウキンカの眩しい黄色をふんだんにカメラに。

帰松してから数日後の報道によれば、以前に長蔵小屋付近に埋め込んだ空きカンなどが多量に発見され、小屋は一時閉鎖という。楽しい山旅だったが、悲しい事ながら山へ入るものは環境に十分配慮すべきとともに、山を管理する当局側の不適切な処置にも注意を払ってほしいものといろいろ考えさせられたことだった。

（中学40回）

俳句

（高校9回）　山崎 行雄

まどろめる　朝の枕辺　威銃
味爽（まいそう）の　しらじら寄する　秋の波
二番穂や　干鰯（ほしか）を　噛（かじ）りみしことも
だんぢりの　稽古囃子（けいこはやし）の　小雨中
赤い羽根　銅鑼（どら）鳴る中の　別れかな

第26号の原稿募集

◎〆切　平成15年5月30日
◎内容　自由（在学中の思い出、同期の催し、近況報告など）
◎送先　〒923－8646
小松市丸内町二の丸15
小松同窓会事務局宛
◎発行　平成15年7月

学校だより

MY進路2002

大学生によるパネルディスカッション

本校では、昨年度から1年生を対象に「MY進路」を開始しました。これは、職場訪問および社会人によるパネルディスカッションを通して、職業についての理解を深め、広い視野から自己の将来を真剣に考え、進路決定を行うことができるよう企画されたものです。今年度は新たに大学生によるパネルディスカッションが加わり、さらに充実したものになりました。

9月27日(金)に大学生によるパネルディスカッション、11月19日(火)に職場訪問研修を実施しましたが、ここではパネルディスカッションについて簡単に報告します。参加していただいた同窓生は次の方々です。

末川　摩衣氏(お茶の水女子大学文教育学部4回生)岩脇　理恵氏(神戸大学国際文化学部地域文化学科3回生)出雲路　智氏(京都大学法学部3回生)中川　琢郎氏(金沢大学教育学部2回生)野原　夕希氏(防衛大学校人文社会科学部4回生)内倉要氏(東京農工大学工学部情報コミュニケーション学科3回生)細川　明里氏(金沢大学理学部生物学科3回生)徳井　宏太郎氏(富山医科薬科大学医学部生物学科3回生)

あらかじめ生徒から出された質問をもとにして4つのテーマ(①高校時代の学習と部活動の両立について②高校時代の学習姿勢について③大学における専門分野・研究分野について④大学生活全般について)を設定し、これらについてパネラーの方々に自己の体験や教訓を語っていただく、という形式でディスカッションを行いました。司会役の浜口恵さん(11H)と西納岳史君(16H)が、各パネラーの個性をうまく引き出して進行をしてくれたので、小松高校での勉強の方法や部活動の取り組み、大学での専門的な勉強や一人暮らしの楽しみ、などについて具体的で有益な話を聞くことができました。実施後に行ったアンケートによれば、「話がおもしろく聞けて飽きなかった」「資料ではわからないことを直接聞けた」「自分の進路を考える参考になった」など、今回の内容について満足している生徒が大変多くいました。西納君は次のような感想を書いているので紹介しておきます。

《「百聞は一見に如かず」というが、大学生の皆さんのお話は、一見に相当するような内容だったと思う。やはり、大学に関する本を読んだり、大学見学会やオープンキャンパスへ行っても、大学の学部・学科のことや大学内の施設の様子などはわかっても、その中で大学生の人がどのような授業を受け、どんなサークルに所属していて、どんなアルバイトをやっていて、どんな生活を送っていて、どんな将来の夢を持っているのかということは、外側からただ見ているだけではわかりにくいと思う。今回のパネルディスカッションでは、大学生の生の声を聞き、大学へ進む意義とは何なのかを教えてもらって、大学のこと、そして将来のことを今まで以上に真剣に考えるようになったのは、僕だけではないだろう。》

大学での研究や就職活動などで忙しい中を、8名の同窓生の方々には快く今回のパネラーを引き受けていただきました。そして後輩のために自分の考えや体験を熱く語っていただきました。そのため、生徒の感想に見られるように、大変有意義なディスカッションになったと思います。今後も是非この企画を継続・発展させていきたいと考えています。一層のご協力をお願いいたします。

2002年度小松高校 部活動の記録

部名	大会名	種目	成績	氏名	備考
	石川県高等学校総合体育大会	女子	第1位	康迫介康里希希子子子	12月現在
陸上部	石川県高校総体	男子100m	2位	文拓悠文希夏夏奈奈智	11"09
		男子800m	6位	加加	1'58"14
		男女110mH	2位	出出出出野野野野村保	2'01"99
		女子100m	6位	栗石井東西佐佐北北新	14"63(大会新)
		男女400m	3位		13"16
		女子800m	優勝		59"74
		男女400m	4位		2'18"56
		女子円盤投	6位		9m43
		男女砲丸投	3位		26m11
		女子7種競技	5位		3192点
		男女4トラック総合	7位		19点
		男女5トラック総合	8位		11点
		男女6トラック総合	4位		19点
	北信越高校総体	男女110mH	3位	康希	インターハイ出場決定
	石川県高校新人	男女400m	3位	文郎	インターハイ出場決定
	陸上競技大会	男女800m	4位	悠大	
		男女110mH	4位	出井	
		4＊100mR	3位	三三	
		男子400m	3位	井	
		4＊400mR	7位	槙	
		男女三段跳び	6位	巳	介平行平史希希穂賀希希
		男女八種競技	6位	森	俊麗孝踊岳夏夏千
		男子走高跳び	4位	辰三中三西佐佐田佐佐	
		男女500mw	3位	森	
		女子400mw	5位	納	
		女子800mw	5位	野野中宮野野	
		女子1500mH	6位		
		女子110mH	5位		
		女子400m	6位		
		女子800m	2位		
	北信越高校新人陸上競技大会	女子	6位	高貞	人人人宗美美
	全国高校総体(5月)(6月)陸大会	200mバタフライ	2位	直直倉真真	全国高校総体出場権
	北信越高校決勝競技大会	200mバタフライ	1位	和和山田	
	石川県選手権水泳競技大会	100mバタフライ	2位	志	
	石川県高校総体	男子の部 個人戦	6位	樹	インターハイ出場決定
		女子の部 個人戦	優勝	愛愛	インターハイ出場決定
水泳					北信越大会出場決定
弓道部	全国高校総体弓道競技	女子の部 団体戦	3位	松井	
	石川県高校	女子団体	3位	高	校
	新人弓道大会	男子団体	優勝	上	友
	加賀地区弓道大会	男子ダブルスカル	優勝	小	高
ボート部	石川高校総体	女子シングルスカル	優勝	村	上
		男子ダブルスカル	1位	田	宮
	石川県高校	シングルスカル	2位	小	佑
	新人ボート大会	男子舵手付クオッドルプル	2位	小	松
		女子ダブルスカル	2位	小	松
		女子シングルスカル	3位	新	谷
		女子舵手付クオッドルプル	2位		石
バレーボール部	石川高校総体	女子	ベスト8		
	石川県高校新人	男子	3位		
	バレーボール大会	女子	ベスト8		
	加賀地区高校	男子	2位		
	バレーボール選手権	女子	ベスト8		
バドミントン部	石川高校総体	女子団体戦	3位	手塚	賢
テニス部	石川高校総体	女子団体戦	ベスト16	手塚	賢
		女子個人戦シングルス	3位	小田	幸奈
		女子個人戦ダブルス	3位		
		男子団体戦	3位	渡辺	北
		男子個人戦シングルス	ベスト8	渡辺	勇
		男子個人戦ダブルス	ベスト8	渡辺	渡辺
テニス男子	石川県高校テニス	1年生シングルス選手権	3位	笠米	田
				米	田
	石川県高校新人	団体優勝	3位		
	テニス大会	シングルス	1位	渡辺	北
		ダブルス	1位	渡辺	北
			ベスト8	渡辺	北
	全日本ジュニア選抜	室内テニス県予選	2位	渡辺	北
	加賀地区テニス	ダブルス選手権	2位	石本	健
				高井	浩
				高井	浩
テニス女子	石川県高校新人	団体	3位	荒井	恵
	テニス大会	シングルス	3位	荒井	恵
		ダブルス	3位		
ハンドボール部	石川高校総体	女子	ベスト8		
	北信越高校総体	女子	ベスト8		
山岳部	石川高校総体	男子	3位	吉	中
		女子	3位	吉	中
カヌー部	石川高校総体	男子K-1 500m	3位	吉	昇
	北信越国体カヌー競技大会	全国A.K.B オープン500m	5位	吉	昇
	石川県高校新人	男子	2位	山	哲
	カヌー競技大会	K-1 500m	2位	新	哲
				山田	哲郎
		K-2 500m	2位	新	哲
		女子	ベスト8	山田	哲郎
			ベスト4	山田	哲郎
剣道部	石川県高校新人剣道大会			石野	有希
野球部	北信越高校野球石川県大会			陸美	希
放送部	NHK杯全国高等学校放送コンクール				
かるた部	全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会				
吹奏楽部	全日本吹奏楽コンクール	金賞	銀賞		県代表権
	全日本吹奏楽コンクール	金賞	銀賞		
	北陸大会 高校の部	金賞	銀賞		
文芸部	石川県文芸作品散文部門	佳作	優秀賞	田	中
	コンクール			菅	森
保健委員会	生徒保健推進講習会	「地域問題について」			